

「チャーチスクール」におけるキリスト教教育（1）

Christian Education in “Church School” (1)

太田 雅子*

Abstract

This paper presents teaching practices in Japanese “Church Schools”. “Church School” is an educational program which is different from Bible-teaching Sunday school. The purpose of “Church School” is to offer a Christ-centered education to the children of Christian families. The home, church and school work are viewed in partnership, leading children into a personal relationship with Jesus Christ. In the US, over 1.7 million children study at “Church Schools”. There are only about 30 “Church Schools” in Japan. Japanese “Church Schools” are church-based Christian educational programs, but they are not licensed as schools by the Japanese government. For compulsory education children at “Church School” must be registered at a public school near their home, while studying at “Church School”. Observations and interviews were done at five “Church Schools” from 2006 to 2009. Many suggestions from their teaching practices were offered and could be applied for the continued advancement in Christian education. The teaching practices suggested the following: ① The establishment of one’s world view and sense of values as influenced by scripture; in interaction with the dominant culture, assessing pagan and other influences ② Education should work on the problem of sin, the goal being to recover the true nature (undamaged by sin), building character upon the salvation of Christ. ③ Children should evolve in the commune of Christ, being influenced by the community, and thus gaining their way of life.

キーワード：聖書的世界観／人間性の回復／信仰共同体による教育

はじめに

現代に生きる子どもたちがどのような宗教心・宗教意識を持っているのかについて、キリスト教主義小学校と公立小学校の高学年の生徒を対象とした調査研究¹⁾を筆者は2005年に実施した。（この研究は、同テーマによる大正期と1979年の調査との比較を含んでいる。）結果として、過去のデータと比較して全体的に無神論的傾向が強くなっていること、キリスト教主義学校と公立学校とでは、人類および万物の起源について「創造論」と「進化論」の考えにおいて差はあったものの、

それ以外はキリスト教主義の学校と公立学校の生徒の間に決定的な違いがなかったという点が明らかになった。この結果から、家庭の影響が大きいこと、またマスメディアを通して得た知識が宗教心・宗教意識の形成に大きく関与することが推測される。

故にキリスト教教育・キリスト教幼児教育が営まれる場としてのキリスト教（主義）学校・幼稚園は、子どもの家庭や周辺社会の影響力を十分に認識・留意した上で効果的なキリスト教教育の実践方法の発見に早急に取り組む必要があると考える。

上述の研究では、小原國芳²⁾の宗教心についての調査との比較であったため、「宗教意識（宗

* Masako OOTA
北陸学院大学 人間総合学部 幼児児童教育学科
保育原理

教心)」という言葉を用いた。宗教心を育む教育、宗教教育というのは、宗教一般の教育、キリスト教以外の宗教にも共通する宗教心を認める教育という意味になる。イエス・キリストを通して啓示される神との関係の構築という視点から、今回の研究では「キリスト教教育」という言葉を用いる。またキリスト教・括弧・主義学校という表現を使う。「主義」という言葉については、さまざまな意見・立場がある。小林公二³⁾は「主義」という表現について以下のように説明している；日本という異教社会（非キリスト教世界）において、キリスト教による教育が日本の社会に対して示す「主体的」な「態度」に関して言われる表現である。キリスト教が、日本という異教社会に対して、異質的なものであり、対立的なものであるという自覚がキリスト者によって明白に意識されているからこそ、「キリスト教主義」とあえて言われる。キリスト教（主義）学校や幼稚園は両方の目的に向けて教育が行われる場である。さらに、「キリスト教主義」の立場でキリスト教教育が実践される時、日本社会が直面する問題に対処できる教育機関として、教育目標となる「人間像」がはっきりと掲げられるべきであると述べている。

これに対して、船本弘毅⁴⁾は、「キリスト教『主義』学校」ではなく、「キリスト教学校」という名称に固執している。「主義」という表現が、キリスト教を遠慮する態勢を作りだし、キリスト教学校におけるキリスト教の後退化・弱体化をまねかねないという理由を挙げ、教育の中心にキリスト教が据えられることを強く主張するためだとしている。筆者はどちらの考えも受け入れるに値すると考え、「キリスト教（主義）学校」を使用する。

キリスト教教育の実践を考える上では、キリスト教教育の目的について明確にする必要があるが、以下に示す小林公二⁵⁾の説明がわかりやすく、この考えを支持したい；「キリスト教への教育」という意味に使われる場合は、キリスト教信仰へ導く教育という目的があり、「キリスト教による教育」の場合は、キリスト教による人間形成が目的となる。そしてキリスト教（主義）学校におけるキリスト教教育は両者が行われる場である。

筆者は、キリスト教（主義）学校に長年勤務し、キリスト者として教会生活を送りながら、信仰継

承の困難さ、キリスト教による人間形成に対する手ごたえの無さを感じている。現代社会の混迷や子どもたちの自己肯定感の低さに対してキリスト教教育は効力を発揮しているのか、社会が内包する価値観やイデオロギーを理解して対抗しているのか等さまざまな疑問を持つ。種々の課題を含むキリスト教教育の実践はどうあるべきなのか。キリスト教教育の原理や有効な方法を探ることは緊急の課題だと思う。

筆者は現在、「チャーチスクール」についての研究に取り組んでいる。「チャーチスクール」はキリスト教教育の新たなモデルであり、そこからキリスト教教育やキリスト教（主義）学校の教育の在り方について検討したいと考えている。本稿では、パートワン（1）として、「チャーチスクール」とは何か、その現状についての報告を中心に行う。

チャーチスクールとは

チャーチスクール（Church School）を和訳すると、「教会学校」となるが、通常のキリスト教会が週一度、日曜日などに子どもたちを対象に行っている、礼拝や聖書の学びのための活動・場とは異なる。クリスチャン子弟のための、イエス・キリストを中心とする、聖書の価値観・世界観に基づく教育的働きである。週日において、礼拝や聖書の学びに加えて小学校から高校レベルの一般教科の学習を行う。幼稚園に当たる就学前教育も実施されている。教師は全員がクリスチャン、大半が教会員であり、教会の働き・ミニストリーの一環として実施されている。こうしたチャーチスクールの出現は、1960年代に米国の公立学校での祈りと聖書の学びが禁じられたことに起因している。公立学校におけるモラルの低下、ピア・プレッシャーによる悪影響、聖書とは異なる世界観・価値観の導入による混乱や別の価値支配が増大する中で、我が子の健全な育ちに対する不安を感じたキリスト者の家庭から教育の新しい選択肢を求める動きが起こった。さらに教育の一義的責任は親自身にあるという認識から、親が責任を持って、学校に替わる教育を家庭中心に行うというホームスクーリングが開始され、1980年代初めに草の根的に全米に広がって行った。（当初は違法とさ

れたが、現在では全州で合法と認められ、オルタナティブ教育として位置づけられている）チャーチスクールはそうしたホームスクーリングを実施する家庭を支援するために、また家庭とその家族が所属するキリスト教会との連携・協力において始められたプログラムである。教会が学びの場を創造し、信仰の継承（神の言葉である聖書に聴き従うこと、主イエス・キリストとの個人的関係を築くこと）や聖書に基づく全人教育を目的としている。教会・家庭・学校の3者協同（パートナーシップ）によるキリスト教教育の実践と行うことができる。全米ではチャーチスクールで学んでいる生徒は170万人以上いると言われ、大学合格率は他との比較においても高い。オーストラリアにおいては、政府の支援があり、より拡充された制度・内容となっている。

日本のチャーチスクール

日本においては、現在このようなチャーチスクールは約30校ある。筆者は2006年9月から2009年9月にかけて5箇所のチャーチスクール（全日制教会学校）を訪問し、授業の参観や牧師・教師の方々にインタビューを行った。現場における調査や各チャーチスクールから提供して頂いた『スクール案内』等の資料、クリスチャン雑誌やインターネット等に掲載されている記事を元に、日本におけるチャーチスクールについて理解した内容を以下にまとめる。

1 全体の概要

チャーチスクールの多くは宗教法人ではあるが、法律上、「学校」としては無認可である。そのため小学校・中学校の義務教育課程においては、生徒は地元の公立学校に籍を置いている。各市町村の教育委員会や在籍校の担当者と連絡を取り合いながら卒業・進学に備えている。高等学校に関しては、米国政府が学校として認可し高等学校卒業資格を得られるACSI（Association of Christian Schools International）に加盟・認可校となっている場合には、米国の高等学校卒業扱いで、国内外の大学を受験することができる。ACSIの認可校でない場合には、通信教育（キリスト教通信制高等学校）の利用や、高等学校卒業程度認定試験に

よる高卒資格取得、大学受験のための指導を行っている。日本でもチャーチスクール出身者のための入試制度を設けているいくつかのキリスト教大学がある。カリキュラムや教材は、米国のチャーチスクールのための教育・教材出版社（約200社ある）のものを参考・利用している。聖書の学びに関しては、教会学校用の教案・資料を用い、一般科目では、公立学校が使用している教科書の内容を吟味しながら用いている場合もある。「国語」や「歴史（中学）」についてはキリスト者の視点で作成された教科書（『地の塩出版』など）を用いているスクールもある。英語教育に力を入れているスクールが多いが、生徒が自分の使命に沿って国際的にも奉仕ができるようになることをその理由として挙げている。毎朝の礼拝に加えて、各授業は祈りをもって始められている。スポーツや音楽などの課外活動を取り入れているスクールもある。

教師は、牧師・伝道師・宣教師、教会のフルタイムスタッフ、保護者、教会員であるが、教員免許を有しているとは限らない。有給・ボランティアと働き方は区々である。授業料・保育料は月額2万～3万円程度である（筆者が訪問したスクールの場合）。

小規模校・少人数制クラスであることを重要視している。これには、一人ひとりの特質や発達、学力の段階に合わせた丁寧なケア・指導を行うという目的以外に、共同の学び・成長がもたらされることをねらっている。そのため応答的な関係、人格同士の触れ合いを可能にする範囲の人数設定を考えている。同じ建物に幼児から高校生までが学び触れ合うという環境の中で、幅広い人間関係を体験し、子ども同士が助け合ったり、刺激し合う姿が見られる。

子どもたちは、教授される内容よりも教師の信仰や生き方・態度に倣い感化を受けるとし、キリスト者としての教師自身の信仰や人間性が問われること、さらに教師の信仰者としての成熟を助けるための牧会の役割や教会全体の支援の大切さを強調している。

「チア・につぼん」や「日本チャーチスクール協会（JCSA）などのチャーチスクールを推進する機関があり、教師・保護者研修・セミナーの開

催、教育内容についての情報交換、生徒・保護者交流会などのコーディネート、月刊誌の発行などを行い、教育の質の向上、スクール間の相互協力による進歩・発展を目指している。また法律的整備や社会的認知を得ることを課題として取り組んでいる。

地域のキリスト教（主義）学校・ミッションスクールへの入学ではなく、チャーチスクールを選択する理由に関しては、費用面以外に次のようなミッションスクールの教育内容への不満という理由がある。学校生活における礼拝の位置づけの曖昧さ、一般教科の中身に対する吟味の不足；国の検定教科書の歴史的・文化的内容を検討・批判せずにそのまま伝授していることによる価値の混乱（聖書的価値観や信仰と対立する価値観を説明抜きで教えている）、教育理念と実践の乖離、国の教育施策への迎合、受験準備教育、クリスチャン教師の減少などの問題を挙げている。

2 チャーチスクール個々の特色と実践

1) ワールド・ミッション クリスチャンスクール（沖縄県）〈訪問日：2006年9月13日〉

1997年設立。沖縄世界宣教教会内に設立されたスクールである。

次の3つの柱をスクールの理念として説明している。① 聖書の教えを基盤として、全人的教育をする。② 国際社会に貢献できる国際的教育を行う。③ 個々の賜物に応じた教育を行い、世界宣教のビジョンを与える。（『スクール案内』より）

多国籍の生徒が学ぶインターナショナルスクールであり、英語と日本語によるバイリンガル教育を実施している。愛児園（3－6歳）・小学生・中学生・高校生レベルの合計約110名（2009年9月現在）が学んでいる。キリスト者の子弟が約7割で、教育方針に同意した場合には一般からの入学も受け入れている。

ACSIの加盟校であり、卒業生の多くが海外（アメリカ・オーストラリア・カナダ・ニュージーランドなど）の大学に進学している。

「バイブルタイム」「クリスチャンライフ」といった科目があり、キリスト者としての姿勢・態度（礼儀・マナーなども含む）についての指導・訓練がなされている。暗唱成聖句大会「バイブル・ボウル」

など聖書教育関連の行事がある。英語教育に力を入れており、「イマージョン・プログラム」を用いている他、英語劇大会、英語スピーチコンテスト、バイブル・イングリッシュ・キャンプなどを実施している。一般教科においては算数と国語は公立学校の教科書を使用しているが、その他は米国のチャーチスクール用テキスト『ABeka』を主に用いている。小学校1年生の理科は、タイトルを理科とせず、「Discovering God's World」となっており、暗唱聖句も記載されている。筆者が参観した生物（高校）の授業は外国人講師が英語で行っており、そのテキストはクリスチャン的生命科学の見地から編纂されていた。地理（中学生）の授業では、各国の産業や民族についての学習に加え、その国のクリスチャンの実情を知り、その国のために祈るということを行っていた。

休憩時間には学年入り混じってバスケットボールなどで遊んだり、談話している姿が見られた。このスクールの良さについて質問したところ、公立高校から転校した生徒のひとは、チャーチスクールの教師は皆に平等に接し、親切にケアしてくれるところが嬉しいと語った。

牧師である喜納正弘氏とスクールの校長である喜納邦子氏は、チャーチスクールについて次のような考えを持っている；

公立学校は無神論教育であり、それに対してチャーチスクールは「主を畏れることは知恵の初め（箴言1：7）」の通り、神を中心とした教育である。教育には、特定の思想や哲学が繁栄されており、中立ということはいえない。クリスチャン教育においては、神（主）との関係を築くことを目的とした聖書の学び、聖書に立つ人格教育が絶対である。クリスチャンとしての道徳基準・スタンダードを持つこと：従順（権威者に対する態度）、真実（正直）、責任感、リーダーシップ、学びにおける素直さ、勤勉、忍耐、誠実、他者を愛すること、与える・仕える心等の育ちを願っている。（『人格の根』という教材を使用している。）

聖書の価値観に立つ教育であるがゆえに、子どもたちへの影響力が大きい教師はキリスト者である必要があり、教師の資質・生き方が教育の鍵となる。こうしたスクールの方針に共感し、献身の思いを持ったクリスチャン教師たちが公立学校の

職を辞して着任して来ている。

国際・語学教育が重要である。国際会議等において英語でやりとりができるように、海外宣教の奉仕者として活躍できるように十分な英語力を身につけさせ、国際人を育てることを目指している。

保護者と教師の連絡を密にすることによる細かなケアを行うことが大切である。双方がキリスト者である場合には、聖書に立った、育児やしつけの共通の考えを持つことができ効果的である。それによって子どもの良い面や個性が伸ばされて来ている。

人を育てる働きは、樹木の栽培方法と似ている。苗木の段階では、風雪や害虫などから守り保護して育てる。大木に成長して強靱になれば、激しい環境の中でも生存していく。人格形成の基礎となる時期には、子どもがどのような価値観、神についての知識、道徳基準を身につけるかということに対して大人は注意深くあらねばならない。判断力が乏しい年齢の低い子どもたちが得る情報や学習する内容が虚偽であったり悪影響とならないように、大人が責任をもって取捨選択して与える必要がある。

学校の運営・経営に当たっては、第一に神の計画・神の力への信頼と祈りに立ち、「与える・仕える」姿勢を大事にしている。今後の課題のひとつとして、クリスチャン家庭の子弟教育機関としての役割と非行や不登校児など問題を抱える未信者の家庭への伝道的役割を明確にしたプログラム作りを行いたい。

2) 日本基督教団・大和キリスト教会・全日制教会学校幼児科ナーセリースクール（奈良県）

〈訪問日：2008年3月6日〉

1983年に設立。「信徒子女の教化育成」という目的と同時に、教会教育の本質として、教会は「真の教育とは何か?」「子どもの命を真に育み育てるものは何か?」をこの世に向けて証し続ける共同体でありたいとしている。（『教会学校案内』より）1959年の教会設立から教会教育を重要視し、その3本柱として、①「主日教会学校」②「全日制教会学校幼児科ナーセリースクール」③「登録制教会学校（ボーイスカウト）」を実施している。「全日制教会学校幼児科ナーセリースクール」は

「主日教会学校・幼児科」の一環で、日曜日から始まり金曜日まで毎日保育が行われている。

ナーセリーとは「苗床」を意味する。人生の苗床期に神と教会と父母の愛に包まれ成長するようにとの願いから、その名称となっている。

教育理念として、次のように『入園案内』に記載されている。「自分は神からその命を賜り、神に愛されているかけがえのない存在であることを知り、ひとりひとりの子どもが、神から与えられた賜物を生かし、『神と人に愛され、喜ばれる子ども』へと成長していくことである。」

教会員でない家庭からの子どもを受け入れてはいるが、その保護者を潜在的求道者として捉え、ナーセリー教育への信頼と評価が、教会への信頼と伝道に繋がると考えている。

2歳半から修学前までの年齢の子どもたちを対象とし、定員は48名である。園児募集は年2回（春期と秋期）、4月・10月に入園式がある。縦割り保育（異年齢合同）と横割り保育（年齢別）を組み合わせた保育形態・カリキュラムで保育を行っている。毎回の礼拝では暗唱聖句を行い、病気で欠席している友だちのために、子どもたち自身でお祈りをする。聖書の世界を表現する作品展など、特色ある行事を実施している。一人ひとりの子どもの特質や発達に合わせた、家庭的できめ細やかな保育実践を目指している。モンテッソーリ・メソッドを一部取り入れており、個々が遊びや活動を選び取り組む中で、主体性や生きる力の基礎を培いたいとしている。おやつは所定の時間内に各自で食べている。子ども自身が皿に盛り、ミルクをカップに注ぐ。テーブルごと祈って食し、食べ終わった後も自分で食器を洗って片付けをしていた。誕生会は月ごとではなく、個別に開かれ、その子どものために皆で計画・準備をし、保護者も呼んで祝っている。出席カードや卒園アルバム等は業者の手によるのではなく、一人ひとりのために心を込めて教師たちが作っている。ままごとコーナーのキッチンカウンターや収納棚などの遊具や備品も教会員によって作られていた。

「家庭生活を大事にすること」を重要視しており、家族と過ごす時間の確保のために延長保育は行っていない。また、2・3歳児は水曜日を家庭保育の日として休みにしている。保護者会（「ぶ

どの会」の活動が活発であり、月1回の伝道礼拝、後援会、研修会、バザー等を実施しており、これには父親も積極的に参加している。

ナーセリーの教師は、全員が教員免許を持ったキリスト者・教会員であり、「有給の奉仕者」という考えで保育にあたっている。さらに、園庭で遊ぶ子どもへの目配り、折り紙等さまざまな遊びや活動の提供・指導が多くの無給の奉仕者の協力によって支えられている。

3) 浜松インターナショナル・クリスチャン・スクール (静岡県)

〈訪問日：2009年7月26日〉

遠州中央浜北教会付属。2004年4月に設立。幼児から中学校レベルまでの生徒17名が在籍している。(2009年7月現在)

「福音主義(聖書信仰)の立場に立ち、聖書的クリスチャン教育を追及する」を建学理念としている。教育の目的として「次世代を担う子供たちを世界において神様に仕える働き人として整える。」を掲げている。以下の8項目が教育方針である。①神様を中心とした教育、②聖書を土台とした教育、③クリスチャン教師による教育、④愛に根ざした人格教育、⑤クリスチャン子弟の教育、⑥国際社会に貢献する人材の育成、⑦教会と福音に仕えるキリストの弟子の育成、⑧健全な家庭の育成(『スクール案内』より)

1500坪の教会の敷地内に畑を作り、農業や園芸を教育活動に取り入れている。ネイティブ・スピーカーによる英語教育やボランティア活動にも重点を置いている。献身の思いと熱意に満ちた20人近くの教師・スタッフにより運営されていた。

週3日、不登校児等のためのフリースクールも開設しているが、チャーチスクールとは目的が異なるため、別のプログラム(日程・内容)で実施している。

4) 光の子どもインターナショナル・クリスチャン・スクール (兵庫県)

〈訪問日：2009年9月8日〉 宗教法人グッド・サマリタン・チャーチ付属。2000年4月に設立。プレスクール(就学前)から高校レベルまで46

名(2009年9月現在)が学んでいる。

スクールの教育理念として大きく次の3つが掲げられている。①聖書にもとづいた人間教育、②明るく肯定的な人生観を目指した人格教育、③ご家族と協力した教育(『スクール案内』より)

具体的には以下のような考えに立って実践している；神がすべての人間をかけたがない存在として愛していることを聖書は伝えている。現代社会は能力や効率という価値判断をもとに人を評価する。そのような社会に生きる子どもたちが自分自身は大切な存在であり、愛されていることを自覚できるようにすることが、教育の中心テーマである。神がすべての人間を使命をもつ存在として作られたと聖書は語っている。子どもたちの個性を尊重し、それぞれが人生の目的、生涯を通して果たすべき使命を見出し、実現できるよう支援している。子ども時代に人格形成の堅固な土台を作ること将来の大きな資産となる。環境や周囲の変化に影響されずに前向きな姿勢でいられること、従順、根気強さ、忍耐、協調性、他者に対する配慮などが養われることを目標としている。

育児・教育の主たるの責任者は親であると聖書は述べている。親や家庭の役割は大きい。家庭の教育理念とスクールや教会の理念の一致と共に成長することが重要である。協力体制作りの方法として、育児に関してのカウンセリングの提供をしており、保護者に対してはスクールの活動への積極的参加、参観会等の折に開かれる子育てに関する講座(「夫婦」「親の役割」などテーマ)への出席、教会の礼拝への出席を求めている。

教師は全員がクリスチャンであり、次のような姿勢で教育に当たっている。「教師は子どもに知識を伝達するだけの存在ではなく、子どもたちの生活の模範となり、子どもたちの目標となるように努力している。」(『スクール案内』)。

「楽しい聖書の学び」を掲げ、中学・高校レベルでは週2回の聖書の授業(小学校は週1回)がある。礼拝は毎日あり、礼拝からその日の日課が始まっている。全生徒、教師たちによる合同礼拝である。筆者は礼拝からスクールの授業を参観させてもらった。中高生の男子も讃美歌を大きな声で歌い、真剣に祈っていた。司会や奏楽(ピアノ)は年長の生徒が担当していた。英語での暗唱聖句

に続いて外国人教師（宣教師）による英語での聖書の話があり、その後日本語での補足があった。全員が主体的に真摯な姿勢で礼拝に参加していると感じた。礼拝の中で語られた聖書の話や、すぐ後の時間に自分の言葉でまとめノートに記すという活動を行っている。週1回生徒たちによる祈祷会も開かれている。

英語教育に力を入れている。幼児から英語活動を実施しており、習熟度別のクラス分けとなっている。

一般教科の教科書（教材）に関しては、「国語（小学レベル）」と「歴史（中学レベル）」は独自で編纂している（『地の塩出版』を教会が経営している）。国語（言語）は特にその国の文化を反映する。日本という異教社会・文化の中であって、無批判的・無自覚的に教材を用いるのではなく、聖書的世界観の視点に立ち、吟味・精選された内容を提示すべきであると考えている。歴史は、聖書の史実や宣教に関しての内容が含まれている。

行事のひとつとして全生徒（プレスクールから）による暗唱聖句大会が年2回あり、英語と日本語で聖書の言葉を暗唱するが、数だけでなく発声や態度も採点の基準となっている。クラブ活動の一環としてサッカースクールが開催されている。指導者はブラジルからの元プロのサッカー選手・宣教師であり、サッカー指導を通しての福音宣教というねらいから、地域の子どもたちへの参加も呼びかけている。

週2回給食が実施されており、衛生管理士の資格を持つ教会員と保護者が調理を行っている。

スクールが郊外にあるため、鉄道の駅までのスクールバス送迎がある。また県外からの生徒のために教会員の家庭にホームステイをするという制度が設けられている。

牧師・理事長である青木靖彦氏はチャーチスクールの教育について次のように考えている；人間の行動や生き方というものは、その人物が何を大切にしているか、何が価値あることで、何が虚しいかという世界観に左右される。聖書的世界観を教育現場においてどのように教え、定着させて行くかがキリスト教教育の課題である。聖書的世界観が、この世の考えとは異なることを認識する必要がある。世界とは何か、人間とは何かとい

う理解が異なる。人間を中心とし神を否定しようとする対立的見解がある。神の言葉である聖書の絶対的権威を認め、それに従順するという生き方が形成されるために、神の言葉である聖書を正しく聴くことが大事である。「主の教育と訓戒によって育てなさい。（エペソ人への手紙6：4・新改訳）」の理解と実践が求められる。

子どもたちが、第一級の神の国の民となることを願っている。それは「第一のことを第一とすることである。真に神の民となれば、日本国民としても、日本を愛し日本のために祈る、真の国際人となることができる。この世界に対して違いをもたらず存在、「地の塩・世の光」となる、神に奉仕する者となるように育てることである。

教育理念が名目だけになり、実質を伴わないということがないために、何故聖書に基づく教育を行うのか、礼拝を行うのかということが、教師たちにはっきりと理解されている必要がある。教師は自らが聖書的世界観に生きようとしており、その重要性を子どもたちに指し示すことができる者でありたい。

5) ガッズキングダム・クリスチャンスクール（東京都）〈訪問日：2009年9月18日〉

東京バイブルチャーチ付属。2001年9月に開校。ACSI加盟校である。プレスクールから高校レベルまでの約60名が在籍している。（2009年9月現在）

基本理念として、次の5つのキーワードを提示し、説明している。① GOD：聖書に基づいてクリスチャンの子弟を中心に信仰と人格を育成する。神が全ての科目と活動において焦点となる。② FAMILY：家庭において親子が共に聖書の価値観と世界観に生きるようになることを土台とする。③ DISCIPLESHIP：神との正しい関係に生き、神を知り、愛し愛される関係を建て上げることが人格形成において不可欠である。④ SOCIETY：神との正しい関係に生きる者は、人々との間に平和を作る者となる。人を愛し受け入れ赦すことを、神の愛にあって実践し、社会に対して積極的立場に立つ。⑤ WORLD VISION：全ての人が神の作品であり、神の計画と使命と可能性を持っている。世界宣教のビジョンを与え、世界に重荷を持

つ人なるように指導する。(『スクール案内』より)

家族のような学校でありたい、家族としての絆を深めるという意図から、「フレンドシップデー」や「スポーツファンデー」など親睦を深める行事が計画されている。朝のほう勉強が捗るという理由から午前中の授業時間が長い。そのため授業間休憩には「モーニングティー」の時間があり、間食をとることを許可している。「クリスチャン・クリエイティブアート」「ミッショントリップ」など特色ある活動を行っている。クラブ活動・委員会活動、他のスクールとの交流会を実施している。筆者はホームルーム（高校レベル）を参観させてもらった。和やかな雰囲気であり、教師や仲間との活発なやりとりが行われていた。ホームルームの終わりに祈りの時間が設けられていた。グループごとに、お互いにのために祈り合うというもので、クラスメイトの祖母の病気のために、大学の入学面接を控えている友人のために全員が声を出して祈っていた。

校長の福田広司氏は次のように述べている；子どもたちが関心や意欲を持ち、思考や工夫によって問題解決に取り組む学習プロセスが大事にされるべきで、偏差値等で評価するだけの教育であってはならない。全ての子どもが大切な神の作品であり、落ちこぼれなどということはあり得ない。一人ひとりに与えられている賜物がある。神の計画がある。個々の子どもたちが使命を見いだし、それを実現することを支援している。

おわりに

「チャーチスクール」はクリスチャン家庭の子弟教育を主目的としている。子どもたちを信仰へと導き、キリストの弟子として育つための教会教育の一環である。教会の働きとしての教育の業ということになるが、「チャーチスクール」の実践は、その時代の社会におけるキリスト教教育の意味を問い直すこと、キリスト教教育の本質・使命・目標の再確認が重要であることを教えている。子どもを取り巻く社会を支配している世界観・価値観が何であるのかを自覚した上で、聖書が示す世界観の「定着」のための具体的・効果的な方法を提示している。人間中心主義（実存主義的ヒューマニズム）や物質中心主義が蔓延る中、また日本と

いう異教文化の中で子どもたちが得る知識や身につける態度について留意し、保護・養護する姿勢が大事であり、それによって主体的・自立的で「地の塩・世の光」となりうる人間として育つことが可能になると提言している。

子どもたちを信仰告白へと導くだけではなく、イエス・キリストに従って、その時代の社会（世）における責任を負って、主体的に生きる人間を養育することがキリスト教教育の中心的課題だと考える。そのためには、子どもたちが置かれている社会という文脈の中で教育というものを捉え直す必要がある。これについて奥田和弘は次のように述べている。「キリスト教教育は、教会の中で人を育てる働きであると同時に、教会が人間の文化的営みである教育との関わりにおいて果たす宣教の働き（ミッション）であるともいえる。したがって、キリスト教教育が担う課題は教会の置かれた社会と教育の脈絡（コンテクスト）で変化する。教育がどのようなコンテクストの中で行われ、どのような人間を育てることが意図されているかがより重要である。」⁶⁾

人間理解から教育は始まる。人間の罪の問題に對して向き合い、福音が土台となってこそ真の人間形成・教育は展開されると、光の子どもインターナショナル・クリスチャンスクールの青木氏は語っている。イエス・キリストの福音は神との関係を回復し、人間を新しく造り変えるものである。人間の成長・発達の過程において命の根拠と意味を問い、人間性の回復のための神の働きに参与することがキリスト教教育であり、このことはキリスト教（主義）学校においても、同様ではないかと考える。船本弘毅は次のように述べている；「キリスト教教育は・・・真の人間形成、真の教養、すなわち人間回復を目指す教育の場として、キリスト教学校は預言者の役割を課されていると言えよう。・・・福音に固く立つことによってこの時代に意味を持つものであり、真に新しいものを生み出し、この時代の誤った教育風潮にプロテストするものである。」⁷⁾

国家や社会のもつ価値観から自由にされ、イエス・キリストとの関係を通してなされる自律の人間の育成こそがキリスト教教育の最大のテーマではないだろうか。

「チャーチスクール」の訪問・取材を通して強く感じたことは、共同体としての教育の場があるということである。信仰共同体として、キリストの聖餐を囲む交わりであることの認識の上に立った、互いの成長を促す場なのである。少人数に限定し、家族的な結びつきを深めることをねらう中で、教師と生徒、生徒同士が受け入れ合い、高め合う姿が見られた。集う全ての者が、共に神を礼拝し・祈り・交わり・学び、共に生きる中、世界観や生き方が築き上げられるための実践を目指していた。

聖書は教会の交わりにおいて、そこに属する者同士が互いに徳を高めること、それぞれに与えられている異なる賜物を用いて、仕え合い、全体がキリストの御丈に成長することを勧めている。奥田和弘⁸⁾はこの「徳を高め合うこと」「互いを建て上げること」の意味である『オイコドメー』について、ギリシャ的な徳『アレテー』と比較しながら説明している；アレテーを求める教育は卓越性を求めるものであり、エリート指向の教育に繋がる。弱い立場にある者は顧みられることがない。しかし、オイコドメーを求める共同体においては、弱さは否定されるものではない。弱さを持つことは人間の現実であり、神の恵みはその弱さの中に注がれる。神の恵みのもとで共に励まし、慰め、愛のうちに育てられるのである。

教育を通して、子どもたちは知識や技術を習得する。また自己の存在意義、人生観や生活態度などを身に付けていく。特に人生観の構築においては、共同体の影響を強く受ける。

「チャーチスクール」においては、子どもたちに影響を及ぼし模範となるところの教師自身の生き方が問われること、教えている内容と自分が行っていることに乖離が生じないようにすべきであることを強く自覚している。さらに教師たちを聖書の御言葉をもって建て上げ・ケアをする教会力や教会全体の祈りと支援が欠かせないとしている。教師を初め共同体を構成する一人ひとりが自己を顧み、御言葉によって養われ、聖霊の助けによる成熟・成長を求めることの大切さ、それによって共同体が生き生きとした、命ある状態を保ち続けることができ、教育力が発揮がされることを示唆している。

今日、子どもたちを取り巻く教育環境は危機的状況にある。いじめや暴力などによって傷つき、競争・比較の中で多くの子どもたちが自信を失っている。主体性や意欲、他者を思いやる心など豊かな人間性の育ちが阻まれている。こうした時代にこそ、真の人間性の回復を可能にする福音を基礎とするキリスト教教育が果たす役割は重要である。弱体化が危惧されるキリスト教（主義）学校は原点に立ち帰り、本気でキリスト教教育に取り組むべきであろう。

「チャーチスクール」という新たなモデルは、この時代にあって、キリスト教信仰に基づく教育のあり方を検討し直し、世に向かってプロテストする存在としての教育がリバイブ（revive）されるために、一石を投じていると考える。

今後も「チャーチスクール」に関しての研究・調査を進め、キリスト教教育の意義や方法を探って行きたい。次稿以降では、一般教科における教材や教科書に関しての検討、家庭・教会・学校の連携や協力の方法を中心に上げたい。さらに米国やオーストラリアのチャーチスクールの実践についても調査し、報告したいと思う。

<引用・参考文献>

- 1) 太田雅子 「子どもの宗教心に関する調査」『北陸学院短期大学紀要・第38号』2006 P.17-29
- 2) 小原國芳 『教育の根本問題としての宗教』玉川大学出版部 1950
- 3) 小林公一 「緒論」日本基督教団宣教研究所・第三部会編 1967 P.7-11
- 4) 船本弘毅 『人を生かすキリスト教教育』創元社 2008 P.14-16
- 5) 小林公一 前掲
- 6) 奥田和弘 『キリスト教教育を考える：「共育」を求めて』日本基督教団出版局 1990 P.243-244
- 7) 船本弘毅 前掲 P.118
- 8) 奥田和弘 前掲 P.191-192

- ・『チアにつぼん・創刊号、No1-30』ホームスクーリングビジョン株式会社 2001-2009
- ・『アーモンド・創刊号-29号』NPO法人 Future & Hope・アーモンド編集部 2005-2007
- ・「<特集>チャーチスクール・教育の新しい可能性を拓く」『百万人の福音・2月号』いのちのことば社 2009